第二十二回公徳文芸賞入賞作品

【俳句部門】

▽最優秀賞

ボクシング場サンドバッグにも汗　　玉名工２年　山田　夢翔

【評】まず、汗が飛び散って、音と映像がリアル。この躍動する力が、つい五七五の調べを越えて、「ボクシング場」「サンドバッグ」「にも汗」と、「句またがり」と字足らずをもたらし、かえって力強い一句になった。パンチが炸裂し汗が飛び散る、パワーあふれる青春讃歌である。（岩岡）

▽優秀賞

人混みに似た顔ひとつ花曇り　　文徳２年　村上　愛梨

【評】想像力を掻き立てるドラマチックな一句。季語「花曇り」が効いています。人混みに見つけた顔は、誰に似ているのでしょう。答えは、読み手に委ねられます。（西口）

風鈴の鳴るたび遠くなる記憶　　球磨工３年　柳原　吏旺

【評】大切な記憶を呼び覚ます優しい風。風鈴の音が消えては遠ざかっていく記憶。それは、儚く美しいものに違いありません。夏の持つ静かな時の流れを捉えました。（西口）

思い出と残暑を置いた虚無の部屋　　熊本工２年　清水　貴行

【評】ちょっと理詰めで、若々しい。「虚無の部屋」に「思い出」と「残暑」を置いて、オシャレ。観念的に見えて、どこか実感があるのだ。（岩岡）

海面にたゆたう夏は陽の鱗　　盲学校１年　井芹　歩夢

【評】海面に揺蕩う夏の陽を感じとった作者は、夏が揺蕩っていると表すのです。さらに揺れながら煌めく海面を、夏の陽の鱗だというのです。独自の美しい世界観。（西口）

夏祭り暴れにいくぞ友達と　　球磨工２年　福永　琉獅吾

【評】なかなか物騒な句だが、元気あふれる、青春のエネルギーのようなものが手掴みで表現されていて、いかにも季語の「夏祭り」にピッタリ。最優秀賞の句にも近いし、努力賞の次の句にも似た感覚。（岩岡）

▽入選

一筋の汗と静寂矢を放つ　文徳1年　大森　継承
花火見て横顔ばかり見てしまう　熊本農3年　島田　椛
夏になる彼の生まれた日が合図　専大熊本2年　杉野　吏衣子
ゆりの花考えることやめてみる　尚絅2年　石坂　優良
夕立に襲われながら帰る家　熊本工3年　横田　龍騎

▽努力賞

水筒の氷鳴り合う部活時　熊本工3年　原口　太士朗
親友よ桜の下の約束だ　玉名工1年　森山　直哉
泥の中堂々と咲く蓮ひとつ　宇土1年　園田　留梨
夏来るフェスが私を呼んでいる　球磨中央1年　中村　ひより
カラオケで男子二人の春休み　球磨中央1年　桑原　翼
蝉時雨跳ねるシャトルと弾む息　球磨中央2年　森山　朝喜
制服を脱いで石跳ぶ炎天下　球磨中央2年　東　冬馬
夕立の匂い残して夜になる　芦北3年　武原　椿樹
夏めいた雲を見つけて席を立つ　熊本2年　住永　大河
数学当たる一つ前秋の雨　尚絅1年　原田　夏歩

【総評】

今回も県内の多方面から多様な作品が送られて来た。高校生らしい喜怒哀楽が垣間見える作品群は、本当にほほえましく楽しく、実感あふれる句が多く、ああ俳句はこんなに自由でのびやかでいいのだと教えられる。感動が真実であれば、技法は自由でいい。単純・率直・明快な句が、俳句らしく若い人らしくていい。その点で、今年もたくさん学ばせていただいた。

短評を書いた最優秀賞と優秀賞以外の受賞作についてふれると、優秀賞の「人混みに」の句は、「花曇り」らしく幻想的で「物語」がある。「風鈴の」の句は、丁寧な写生で、うまい。「海面に」の句は、「夏は陽の鱗」ととらえた感覚が鋭い。造形の力がある。（岩岡）

俳句には余白がたっぷりあります。たったの十七音。けれども、その十七音の中に想いも、季節の匂いも、心の揺れも入れることができます。俳句とは、心が動いた瞬間を切り取る表現です。一瞬の感情を閉じ込めたドラマとも言えます。

「ボクシング場サンドバッグにも汗」には、くどくどとした説明がありません。繰り返される句またがりは作者の呼吸。汗という季語を最後に置いただけ。そこが面白い。ぶつっと切って放り出すことでその場の状況、空気、音や匂い、その場にいた人の心情までも自由に想像させるのです。俳句は短い。それこそが、そのまま表現上の強みになる、ということを証明しています。

特別な出来事でなくてもいい。ふと立ち止まって見上げた空の色、風鈴の音、波打ち際の光、百合の香り・・。俳句は、小さな一瞬を丁寧に掬い取るための器。きっとあなたが今を生きているという証を留め、未来に届けてくれるでしょう。（西口）

【短歌部門】

▽最優秀賞

寒い冬ハウスへ向かうわたしたち育つ命に引き寄せられて

熊本農3年　恒松　遼

【評】目標を持って学ぶ若者の姿がくっきりと表現されています。実習の時間なのでしょう。目的と時間を共有する仲間への信頼感と熱量がばっと伝わってきます。若い感情の自然な流露に共感します。（塚本）

▽優秀賞

将来へはばたく翼手に入れた卒業式の後の静寂

熊本2年　宮本　鏡子

【評】作者は二年生なので、自身ではなく卒業生へのエールか。「羽ばたく翼手に入れた」に感心した（橋元）

雨音と土の匂いで思い出す姿は見えぬ梅雨の貴婦人

盲学校1年　井芹　歩夢

【評】「貴婦人」は紫陽花である。音と匂いで思い出したが姿は見えない。目の不自由な人ならではの秀作。（橋元）

君のこと書いてもいいの願いごと揺れる心と揺れる笹の葉

城北3年　林　恒河

【評】「揺れる」という言葉のリフレインが良く、内省の想いと眼前の物とを波動のように感じることができます。言葉への怖れと嬉しさが巧みに表現されています。（塚本）

泣きながら土を握った最後の日負けた悔しさまだ熱をもつ

専大熊本1年　倉田　景透

【評】敗戦後の〝甲子園の砂〟は定番のようですが、これは〝藤崎台の砂〟でしょうか。若い意気を感じさせて余りある結句の「まだ熱をもつ」のフレーズです。（塚本）

夕暮れの風薫る午後麦の穂がささやく声と日差しの踊り

玉名工1年　福田　虎之助

【評】夕方の麦畑の様子を擬人化して詠んだ楽しい作品。「風薫る午後」は「風薫る中」としたい。（橋元）

▽入選

父と祖母の魂乗せて流ゆく精霊舟は見えなくなった

芦北2年　入江　美有

街中に映える装飾消える闇光で繕(つくろ)う真冬の孤独

済々黌3年　右田　未羽

汗ぬぐう青空の下となりには主人公顔のひまわりがいる

文徳2年　上田　理心

スマホからいろんなことを奪われるやりたいことはいっぱいあるのに

阿蘇中央3年　森島　優美

窓の外授業聞きつつ眺めれば小さくポツリと狐の嫁入り　球磨工３年　古川　藍媛

▽努力賞

快晴に富士宮では美しい富士山とても輝いている　熊大附属特別支援３年　上野　獅恩

ふと気づく日々変わりゆく蟬の音が夏の終わりを我に知らせる　宇土１年　園川　慧樹

夏空に伸びゆく影とあなたの手ゆれるひまわり息づく鼓動　玉名工２年　大里　結月

生きる意味君の名ひとつ抱きしめて壊れぬ想い夜に沈める　熊本工３年　家入　煌汰

変えてやる決意を胸に歩み出すあの日の私誇りに思う　小川工１年　田口　華楼欄

揺れる灯手を伸ばしてもざわめきの余白に染まる声も瞳も　大津２年　針尾　結子

雲と同じ我への期待が押し寄せる責任感も雨も降っている　文徳１年　白川　陽菜

放課後の体育館に響いてる目標に向かう努力の音が　球磨中央２年　川邊　悠斗

にわか雨カバンにつけたキーホルダー小さい傘から飛び出て濡れる　菊池女子２年　合志　瑚把留

文字消してやっぱり言えない情けない夜空に舞い散る私の想い　人吉高五木分校３年　村山　華音

【総評】

応募作品は半分近く減少したが、作品のレベルは数段上がった。これは、全校生応募などがなくなり、自信のある生徒の投稿が主になったためである。それにより校外生活に日常生活を題材にした作品が増えたのである。昨年までは登下校や花火大会、お祭り(今年も多少はあったが)などに限られていた。新しい題材には花や風景、家族との関係など多様性が見られた。最優秀賞作品のような校内の出来事を詠んだ優れた作品も少なくなかった。また、いつもながらの淡い恋心の歌にも微笑ましい作品があった。

ところで、この公徳文芸賞は今年で二十二回を数える。「短歌甲子園」と呼ばれる岩手の全国高校短歌大会はこの夏で二十回だった。こちらが二年早いのである。この賞の伝統に改めて敬意を表したい。(橋元)

この公徳文芸賞は二十二回を迎えました。形式は違いますが岩手県の短歌甲子園は二十回、宮崎県の牧水短歌甲子園は十五回ですから、回を重ねるもっとも先端の高校生の文芸賞と言えるでしょう。しかも短歌をはじめ四部門を網羅しているのも他に例を見ません。

ところで、今年は二人の選考員の予選の作品に重複はあまりありませんでした。それだけ粒が揃った作品が多く、最終選出にはより慎重を要した次第です。

作り手の心の動きが作品化されたとき、受け止める側の心もまた動きます。たんなる思いではく、たんなる空想でなく、日常の現実があってそれで発想された作品は読む者の心に届きます。日常と自己をていねいに見つめた作品が多く、若い世代への信頼を深めることができたことを感謝したいと思います。(塚本)

【自由詩部門】

▽最優秀賞

「砂漠」

砂地が広がっている
時計の針が木枯らしを運ぶ
黒板には一つの汚れもないようで

砂地が広がっている
人の気配はとうに死んで
外に吸われたままらしい

砂地が広がっている
真白いプリントが
眩む僕らを嗤うのは
勇気の一粒もないせいだ

砂地が広がっている
忘れたくないうた声が
優しくサッシを叩くので
僕は小さく口を開いた

砂地が湿っていく
こんなにひどく痛いのに
夢な訳がないんだよ

砂色の机を撫でながら
ここは僕らの教室だ

熊本2年　神谷　紅葉

【評】みんな一緒にいるはずの教室が寂寞とした砂地のように荒み、一人ひとりが俯き加減で孤独に苛まれている様子が思い浮かびます。難解な漢字を使用しない、高度な比喩表現に圧倒されました。最後の2行も秀逸です。（深町）

▽優秀賞

「日常を愛す」

僕ら出会い別れを繰り返し背を伸ばす
思い出振り返り笑い踵を上げる
熟れた果実の実を見つからないようにと

努力の足跡消さずに残したあの日
だれかに見せたい明日の張る心を

僕達は
生まれ育ち憩う場所でまた足を伸ばす
生きる意味を探し間違え振り返ってみる
どこにもなかった繋がりを見つけ喜びにしてみる
色のないこの世界で生き延びようとしてみる

目で見てみないと
愛されていないと
毎日が擦り減るからそばに居たい
見えている景色も
感じている鼓動も
消えないようにとまた守ってゆく日々

笑える日ばかりじゃないけれど
泣きたい理由も思い出せなくて
ゆっくりでも歩いてゆくことが
誰かの明日に繋がるなら
それでいい

望んだはずの日常を嫌いにならないように
その目の内を　日常の中で
一つづつ　愛してみる

球磨中央２年　　山本　泰生

【評】詩の題名に、作者の哲学が感じとれる。一連と二連が特にいい。「背を伸ばす」「踵を上げる」等の詩句が「色のない世界」で生き延びる知恵のようだ。（内田）

「拝啓、御前へ」

なんだその目は
その目は光ではなかったのか
よくもそんな目で
久しぶりと言えたものだ

なんだその今は
その今は夢ではないだろうに
よくもそんな今で
かつての友と話せたものだ

なんだその顔は
その顔は仲間のものではない
よくもそんな顔で
会えてうれしいと泣けたものだ

なんだこの私は
それは誇りではなかったのか
こんな今を受け入れて
かつての夢を捨てて
こんな詩を詠んで
よくも助けを求めたものだ

熊本２年　住永　大河

【評】あるべき姿になれない作者のもどかしい心情が伝わってきました。本音と建前を無意識に使い分けられる器用さに戸惑いもあるのでしょうか。リズミカルな書き方には無駄がなく、タイトルにも工夫が感じられます。（深町）

「正解」

毎日問いに出会い
毎日答え合わせをする

簡単な日もあれば
難しい日もあって
一人で解決できる日もあれば
一人では答えにたどり着けない日もあって
出した答えに満足する日もあれば
後悔する日もあって

今日正解だと思った答えが
次の日には間違いだと思うかもしれない
だけどいつかの自分が笑っていれば
その時はどんな答えも正解だったときっと思える
そんな日が来るのがどれだけ先だとしても
私は毎日自分の問いと向き合っていたい

済々黌３年　村上　菜月

【評】読み進むうちに、問いと答え合わせから、逃げないという「正解」が自ずと浮き上がってくる。例えどんなアポリアであっても、向き合う矜持と共に。（内田）

「忘れじの花」

春のさくらは　風にあらがえず
きみと笑った記憶ごと　空へ散った
たなごころにすがる花びらは
ふれた瞬間消えていった

夏の紫陽花は　風をまとい
心も変われ　と　つげるけれど
私の想いだけは
雨にとけずにそこにのこった

秋の彼岸花は　風にふれ
川辺で孤独を照らしつづける
すれ違ったひとみの温度も
未練に変わるのを知りながら

冬の椿は　風を抱き
静かに落ちる瞬間さえも美しく
その優さにふれたとき
君のかげだけが　遠ざかった

風に靡く　紫苑が咲く
しずかに揺れながら　囁いた

尚絅３年　　村岡　愛莉

【評】四季の花に自分の心情をなぞらえた詩で、届かない君への想いに切なさが感じられました。繊細な恋心は、美しくも儚い花のように散っていくようです。自分の想いと自然の様子を交錯させる表現が素晴らしいです。（深町）

「ひこうき雲」

夕暮れ時
ゴォー、と音がした
空を見上げると
真っ白い、飛行機
かすかにひこうき雲をなびかせながら
太陽に向かって真っ直ぐに

まるで自分の進むべき道に
迷いが無いかのように

真っ直ぐに

ふと思う
私は今、どこを歩き、
どこに向かって進めばいいのだろう

正しい未来を
選べるだろうか

あの飛行機のように
選んだ未来を真っ直ぐに進めるだろうか

ひろいひろい　グラデーションの空に
白く機体が輝いた

大丈夫、

風に乗ってそう聞こえた気がした
一番星が見え始める空に
道しるべのように

芦北1年　岩井　利央郁

【評】夕暮れは特別なひと時だ。ひこうき雲に自分の未来を重ねる。これ以上はないわかりやすい表現であるが、終連が、一幅の名画のような詩になっている。

▽入選

「伝える」

笑いたいときにも　大脳は神経に伝えなきゃいけないし
手紙だって　ポストから飛び立たなきゃ届かない
雨だって　雲が運んでくれないと降らないし
愛だって　言葉にしなきゃ　ただ蓄えられた塵埃
どんなにちっちゃな品物も　取るに足りない雑談も
トラックがないと　言葉がないと
ぜんぶぜんぶ　伝わらない
だから　わたしは伝える
もらって　わたして　伝える
アスファルトの中の　さびしげな花も
高層ビルの並ぶ　四角い大地も
わたしは伝う　わたしは伝う
両手ですくって　いっぱい抱えて
わたしは伝う　未来へ伝う

熊本2年　西坂　太希

「夏休みの一番の思い出」

一直線にのびる光が
緑・ピンク・青
すべてがまぶしく見えて
まばたきするのがもったいない!!
胸のどこかで
あの人の声が何度も扉を叩く
呼吸よりも先に
声があの人のもとへ駆けていった
手を伸ばしても届かないのに
あの時間だけは
私とあの人の距離が
ゼロになった気がした
まだ終わらないでほしい
この熱が冷める前に
もう一度
あの人の歌でいっぱいにしてほしい

芦北3年　土屋　瑠璃

「閉幕」

あなたの期待　あなたの願い
胸に宿るは淡い夢
醒めるかどうかはあなた次第
けれども冷めてはなりません
夢という名のデザートは
熱もつ間に匙を置け
そうして閉じる　劇の幕
興奮冷めぬ　喝采の
中で　どうぞ　おかえりください

済々黌2年　青山　日香

「無常観」

無常観
それに対する恐怖感
変化が怖い
終わりが怖い
見ているものが
聞いているものが

感じられるものが
変わって　終わっていくことが怖い
雨の中　今日を忘れていく
良い思い出も　悪い思い出も
何が面白かったのかも
どこかで聞いた題名も
みんな忘れていく
僕は思考の海に　溺れていく
海の水分が蒸発して　消えてなくなれば
僕の気持ちも変わるのだろうか
無常観
刹那を大切に生きよう

盲学校1年　井芹　歩夢

「減る」

やる気が減る
それはあなたが勉強を頑張ったから

体力が減る
それはあなたがたくさん体を動かしたから

時間が減る
それはあなたの人生が充実しているから

我慢が減る
それはあなたが自分を大切にしているから

ストレスが減る
それはあなたが幸せだから

お腹が減る
それはあなたが生きているから

ああ　減るということはいいことなのか

南稜3年　税所　心菜

▽努力賞

「鮪」

憐れなマグロは泳ぐことを辞(や)められない
それを不思議に思うこともなく
ただひたすらに
がむしゃらに

この先にゴールがあると信じて

でも
私たちは違うから
マグロは止まると死んじゃうけれど
私たちは止まっても死なないから

だから、
ほんの少しだけ立ち止まって
ほんの少しだけ周りを見て
コンクリートの隙間から
力強く顔を出す小さな花を
見つけたっていいんじゃない

済々黌３年　右田　未羽

「ちくわ」

おいしいよね
ちくわ
ともだちと
こんちくわ
ねこの名前も
ちくわ
バイトおわって
ちくわくんに
こんちくわ
やっぱりわたしは
ちくわがすき
きみはどう？
ちくわのあなをのぞいたら
見えない世界が
みえるかもね

芦北２年　土屋　藍莉

「ずっといっしょでずっと違う」

立ち止まってあいさつをする人がいた
わたしはムズムズソワソワおちつかなくって
止まってペコリ、止まってペコリ
まねをした
背筋を伸ばすあの子が、私の目にうつりました
尊敬、勇気があふれ出て、
私は、背を、伸ばしました

私は、背を、伸ばせました
けれどそこには、何か、べつの何かが心にあった
一歩進むたび三歩後ろにいる気がして
あの子が十歩
彼が八歩
彼女が九歩
君が百歩
さきにすすんでいるのだと
とおくにいるのだと
わたしのあたまが
おもう、おもい、おもく、おもう
一歩進み、期待を
一歩進み、プライドを
一歩進み、感謝の言葉を
背負って走ります
とってもおもくて、けれどそれを糧にもして、
まがる背を伸ばして、走っています
君の、近くに行くために
君の、隣に行くために
君の、先を、行くために
ともだちのてをひくために
私、頑張ります
もっと、もっと、もっと、

「なりたい」

雲は自由だ
自由に形を変えられて
自由に風に流されて
自由に他の雲と融け合えて
私も自由になりたいな

水は綺麗だ
綺麗に透き通っていて
綺麗な音を立てていて
綺麗な軌道で流れていて
私も綺麗になりたいな

幼子(おさなご)は楽しそうだ
楽しそうに遊んで
楽しそうに笑って
楽しそうに眠って
私も楽しくなりたいな

芦北1年　羽田　瑠々花

なりたいと思っているのに
私は何にもなれない
誰よりもなりたいのに
……なりたい？
そうだ

なりたいだけでは駄目なんだ
雲のように自由に
水のように綺麗に
幼子(おさなご)のように楽しく
私もなってみせるんだ

済々黌1年　加藤　綾

「新生活」

新生活は始まりの日
新しい自分が始まる日
たくさんの失敗と対面するからこそ
新しい自分ができるのだ

新生活は出会いの日
今までにない多くの人と出会う日
意見があわず否定されるからこそ
新しい考えに出会うのだ

新生活は名残惜しい日
昔の思い出をおもいだす日
楽しかったあの時に戻りたいと思うからこそ
新しい思い出が尊くなるのだ

新生活は決意表明の日
目標に近づく日
挫けたり挫折したりするからこそ
新しい心は決心するのだ

新生活は思い出の日
この日常が今は大変でも
　きっといつかは大切な思い出となる
来年も再来年も新生活があるからこそ
新しく私は成長するのだ

小川工1年　田口　華楼欄

「人生の光跡」

人類の歴史は長い
その中で生まれた私
たった一つの命
誰にも真似できない私

花火は一瞬で咲き
一瞬で消える
同じ花火は二度となく
環境や心によって変わる

人生もまた短く儚い
人類の歴史の中で
一瞬で咲き消える
花火のよう

だから私は今日を歩む
自分の花を何色にし
どんな模様で咲かせるか
その答えは　自分だけのもの

あなたは何色の花火を咲かせますか

宇土1年　園田　留梨

「自由」

制限　がないということ
ルールもないということ
人に左右されないということ
嫌なことは嫌ということ
好きなことをするということ
でも、少し不安
誰かを傷つけていないか
自分にすべて任されるのは
大きな責任を背負うこと
なんだか不自由な気がする
自由ってなんだろう

南稜3年　小野　高幸

「ネコヤナギ」

どれだけ前を向いて進んでいても
いつかは立ち止まる時が来る
そんな時でも自分を信じ突き進み

ネコヤナギが実るのを信じ進み続ける

日に照らされた日
ときには暗く落ち込む日もあった
それでも進み続け
きれいなピンク色に染まった

でもいつかまた枯れる日が来る
そんな時はまた
つぼみからやり直し進んでいく

尚絅３年　後藤　安奈

「ぼくの過去」

みんなは　手持ち花火できるけど
ぼくは　できなかった。

みんなは　ふうせん遊びできるけど
ぼくは　できなかった。

みんなは　楽しくおしゃべりできるけど
ぼくは　できなかった。

みんなは　たくさんおよげるけど
ぼくは　できなかった。

みんなは　エアータオルできるけど
ぼくは　できなかった。

みんなは　ボール遊びできるけど
ぼくは　できなかった。

みんなは　リボン結びできるけど
ぼくは　できなかった。

みんなは　お金のけいさんできるけど
ぼくは　できなかった。

みんなは　おりがみできるけど
ぼくは　できなかった。

みんなと少しちがっても
できない　が　できるようになる。
だから　生きるのは楽しい。

熊本はばたき高等支援１年　立石　永太

「自然を感じる」

木の名前を呼べば
森は少し近づいてくる
スギもヒノキも
ただの緑じゃない
枝の向き　葉の色　樹皮の割れ目
全部違う顔をしている
刈払機を振るたびに
草と土の匂いがいっしょに立ちのぼる
その一瞬だけ
森が深く息をして
僕もその中に溶けていく
手の感触耳に残る音　目に映る木々
そういう全部の感覚が
教科書よりもずっと確かな答えになる

芦北2年　山田　翔瑛

【総評】詩人エマソンは「自然の光は、絶えず、心の中に流れ込んでくる。そして、われわれは心の中の光を忘れている」と言った。皆さんの作品を読むことは、青春の心の光と対話できる得難い経験である。詩とは、元来評価できないものであり、あくまで選者の価値観によることはご容赦頂きたい。昨年に引き続き応募のあった実力者には、自ずと厳しい評価になったことも述べておきたい。毎年、見られていた戦争や災害等をテーマにした詩が、今年は姿を消したことに気づいた。戦禍も災害も、もはや日常になってしまったのかも知れない。その代わり自らの日常に、内省的で批判的な眼差しを向ける優れた詩が見受けられた。今一つの特徴として、意表をつく感覚の短詩が幾遍もあった。宝石の欠片のような言葉に、詩人の未知の可能性を予感した。今後に期待したい。詩とは特別なものではなく一部の専門家のものでもない。毎日を、懸命に生きることが詩心の原点だと改めて感じた。（内田）

詩を書く行為は、孤独な作業だという。「楽しくて仕方がない」という気持ちで書く人は少なかろう。では、なぜ書くのか。それは、「自分らしさを表現できるから」も理由の一つであろうが、突き詰めると「生きていることを実感できるから」ではないか。こう思えたのは、今回寄せられた作品の多くに、自己の内面を深く見つめる様子がうかがえたからである。これまでは「多様性」を訴える詩が散見されたが、今回は「生きづらさ」が垣間見える詩も多かった。それでも好感が持てるのは、やはり高校生という感性が瑞々しいからであろう。なかには既に一定の技量を有し、軽々と詩境を越えてゆくような作品もあった。理論や形式にとらわれず、伸びやかに表現する作品もあった。短文ながら、詩情がきらりと光る作品もあった。しかし、ほとんどの作者は無自覚で書いていることだろう。産で殊勝なのもまた、高校生という書き手の魅力である。今回の詩作を機に、これからもどんどんと書いてほしい。そして、自分という存在の大切さを感じてほしい。（深町）

【肥後狂句部門】

▽最優秀賞

良か思い出　シャツに一滴墨の痕　　城北３年　江藤　愛梨

【評】シャツについた墨の痕から、書道をがんばったこと、入賞したこと、書道を通じた友情等、様々な良い思い出を読み手に想像させてくれる句だ。「一滴」が作者の思い出をより深いものにした。言葉選びの巧みさが良い句に仕上げた。（鳴神）

▽優秀賞

良か思い出　沈む夕日へ漕ぐペダル　　熊本工２年　泉　瑛心

【評】一日を一生懸命に過ごし、色んな思いを抱いて自転車を漕いだ帰り道。夕日に向かうペダルは重かった日も、軽やかだった日もあっただろう。全てが作者の青春。（山野）

夢がいっぱい　母の支えが背中押す　　城北３年　姫野　悠翔

【評】どんな夢も自分一人では叶えることはできない。作者も良く分かっている。母親とともに夢に向かう姿、母親との良好な関係がこの句から読み取れる。応援したくなる句である。（鳴神）

さあこれから　やる気スイッチどこだろう　　球磨中央３年　馬場　遼斗

【評】やらなければならない時が来た。分かってはいるがなかなか動き出せない。やる気スイッチという他力に自分を委ねる人間の弱さをユーモラスに表現できた。（鳴神）

良か思い出　祖母のぬくもり膝の上　　宇土１年　中村　文香

【評】おばあちゃん子の祖母への思いが素直に出て温かい句になった。高校生になった今、優しいおばあちゃんの膝の上に抱っこされたことを思い出し、懐かしむ様子が良く表れている。（鳴神）

良か思い出　セミの鳴き声鳴る弦音　　球磨中央３年　竹田　閃維

【評】静寂の中の２つの「音」だけで、夏の弓道場の情景を美しく詠みあげた。わずか12文字から、弓を引く時の集中や緊張感がありありと伝わってくる。（山野）

▽入選

良か思い出　無知な僕らの冒険記　　熊本工３年　辻本　勇馬

良か思い出　チームでボッチャ２回戦　　熊本はばたき高等支援１年　鹿本　英寿

良か思い出　真っ黒になる日記帳　熊本商２年　井野　ゆめか
夢がいっぱい　三年ためた貯金箱　宇土１年　園田　留梨
夢がいっぱい　白き息吐く受験前　城北３年　鳴海　未來

▽努力賞

夢がいっぱい　電気消えても語り合う　球磨工３年　園田　南波
夢がいっぱい　膨らむ想い枝別れ　城北３年　伊藤　杏朱理
さあこれから　九回ウラのツーアウト　黒石原支援３年　犬童　一秀
夢がいっぱい　思い描いて受験へと　玉名工２年　田﨑　夕愛
さあこれから　クライマックス僕の恋　芦北３年　前田　望希
良か思い出　君の笑顔とラムネ瓶　熊本工２年　後藤　桃果
さあこれから　未来の扉切り開く　阿蘇中央３年　志賀　ひなた
夢がいっぱい　自分で決める分岐点　熊本工３年　村上　晃郎
さあこれから　優勝に向けキックオフ　熊本はばたき高等支援３年　早川　朋希
良か思い出　仲間と語る無駄話　熊本商２年　丸目　一颯

【総評】

応募数が増え続けていることに感謝しています。高校生らしい若さ溢れる句に出会い、選考に大変苦労しました。入選句には部活動、友情、恋愛などの高校生活での体験を詠んだものや受験を始めとした将来への夢や期待を詠んだものが多くありました。実体験を句にすること、自分の心情を素直に表現することの大事さを改めて感じました。

句を作る上で大事なことをあげてみます。先ず、「句から想像させること」。事実を羅列するだけでは良い句にはなりません。句の背景を想像させてください。そのためには言葉選びが一つのポイントです。比喩や間接表現が使えればさらに良いでしょう。二つ目は「句から映像や絵を浮かばせること」。これも言葉選びや素材選びがポイントになります。最後に注意したいのは「勝手に言葉を作らないこと」。辞書に無かったり、周りでだけ流行ったりしている言葉は使わないことです。読み手あっての肥後狂句であることをわすれてはいけません。では、来年も素晴らしい句に出会えることを期待しています。（鳴神）

昨年以上に多くの句が集まり、沢山の高校生が狂句に親しんでくれたことを嬉しく思います。今回は七・五のリズムが良い句が多かったと感じました。

「良か思い出」の笠では、部活や花火、友達と遊んだことなど、充実した思い出を沢山の句にしてくれました。私も一緒に参加しているような気持ちになりました。「さあこれから」の笠では将来の希望や不安を素直に詠んでくれた中、未来という言葉の多さが印象的でした。

多くの句が、自分一人ではなく、家族や友達、仲間などの「誰か」の存在を感じさせる内容でした。高校生は誰かとの繋がりを大切にしながら生きているということ、それをたった12文字で選者に感じさせてくれた皆さんの力はすごいなと思います。

肥後狂句は、この短さで自分の思いを表現することができます。皆さんは高校生にして狂句の作り方を知り、作品を作ってくれました。ぜひ今後の人生でも、自分の思いを伝えたいときに狂句を詠んでみてください。（山野）